

(石 川 県)

1 品種構成の動向

引き続き「コシヒカリ」が中心であるが、良質で収量水準の高い「ゆめみづほ」の作付けが推進され、増加傾向にある。

2 栽培技術等の動向

食味と品質をより向上させるため、品質管理に重点をおいた栽培指導（適切な肥培管理や疎植の推進等）が行われている。

3 温暖化の影響

田植期は横ばいで推移しており、出穂期及び登熟期間の最低気温（夜温）も横ばいとなっている。

また、一等米比率は平成15年以降おおむね80%を上回っており、また、登熟（千もみ当たり収量）も安定していることから、温暖化によるマイナスの影響は見られない。

＜最近の作柄（平成14年産以降）＞

年次	全もみ数	登熟	被害	作況指数			一等米比率
				8/15	9/15	最終	
H14	—	—	◎	やや良	102	102	64
15	—	×	××	やや不良	96	96	82
16	—	○	—	平年並み	101	100	78
17	○	—	○	やや良	101	101	80
18	—	—	—	平年並み	100	100	80
19	—	×	—	平年並み	99	99	85
20	○	—	○	やや良	102	102	82（1月末）

注：◎：良（多い） ○：やや良（やや多い） —：平年並み ×：やや不良（やや少ない） ××：不良（少ない） ー：やや多い ×××：多い
○：やや少ない —：平年並み ×：やや多い ×××：多い

4 収量水準の動向

収量水準の高い「ゆめみづほ」の作付面積割合が増加していることから、収量水準は上昇している。

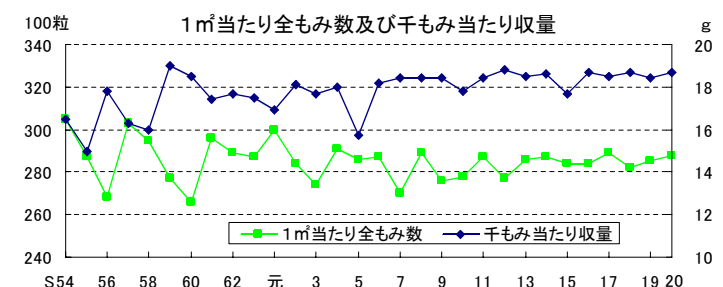
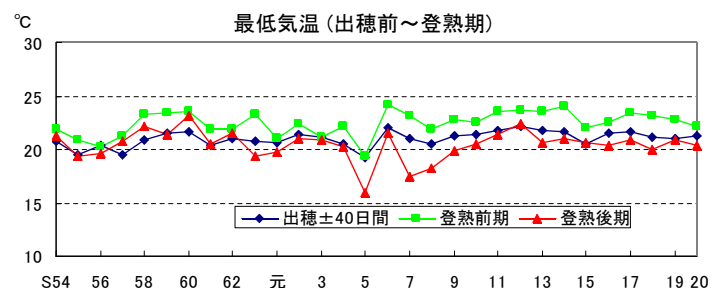
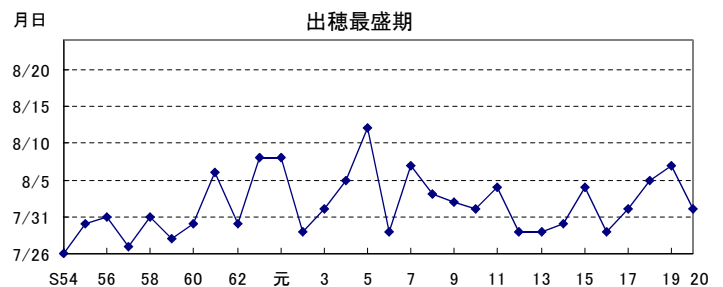
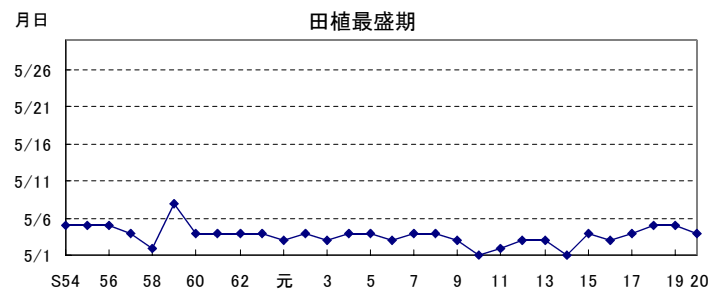
＜品種別、地域別作付面積の動向による単収水準の推移＞

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量(kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H16	17	18	19	20	21 (見込)
コシヒカリ	515	75.9	76.9	76.7	75.3	73.2	71.5
ゆめみづほ	547	9.2	10.0	9.5	10.7	14.4	16.3
能登ひかり	459	3.8	3.5	3.9	3.1	2.7	2.5
ハナエチゼン	533	3.2	2.8	3.0	2.1	1.9	1.5
ほほほの穂	529	1.9	1.8	1.8	1.6	2.5	2.5
単収水準の動向(前年との差)					0.8	1.5	0.7

地域(地帯)名	(参考) 10a当たり 収量(kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H16	17	18	19	20	21 (見込)
加賀高位	550	39.5	39.9	40.0	39.8	39.6	39.6
加賀低位	515	16.7	16.3	16.4	16.6	16.8	16.7
能登高位	509	14.0	14.2	14.3	14.3	14.4	14.5
能登中位	492	15.1	14.9	14.9	14.9	15.0	15.0
能登低位	471	14.7	14.7	14.4	14.4	14.2	14.2
単収水準の動向(前年との差)					-0.1	0.0	0.0

※ 10a当たり収量の水準は最近7か年のうち、豊凶2か年を除く5か年平均
平成21年産見込は市町村別の需要量に関する情報及び種子の予約数量から推計

＜田植期、出穂期、最低気温、もみ数及び登熟の推移＞



(静岡県)

1 品種構成の動向

良食味で消費者ニーズの高い「コシヒカリ」の作付けが増加し、収量水準の比較的高い「あいちのかおり」や「キヌヒカリ」が減少する傾向にある。

2 栽培技術等の動向

高品質・良食味米の生産に向け、適正な肥培管理や適期刈り取りの徹底等の指導がなされている。

3 温暖化の影響

最近、田植期は横ばいで推移しており、出穂期及び登熟期間の最低気温(夜温)も横ばいとなっている。

また、登熟(千もみ当たり収量)は近年上昇傾向となっており、温暖化によるマイナスの影響は見られない。

<最近の作柄(平成14年産以降)>

年次	全もみ数	登熟	被害	作況指数		一等米比率
				9/15	最終	
H14	×	—	—	100	99	57
15	×	×	×	95	93	74
16	×	○	—	102	102	60
17	×	○	×	99	99	66
18	×	○	×	96	96	73
19	×	—	—	98	97	73
20	×	○	—	100	99	74 (1月末)

注：◎：良(多い) ○：やや良(やや多い) —：平年並み
×：やや不良(やや少ない) ××：不良(少ない) ただし、被害は◎：少ない ○：やや少ない —：平年並み ×：やや多い ××：多い

4 収量水準の動向

「コシヒカリ」の作付割合の増加に加え、品質を重視し、全もみ数を適正に管理する栽培指導が普及しているためか、近年の全もみ数は減少傾向にある。

このため、収量水準は低下している。

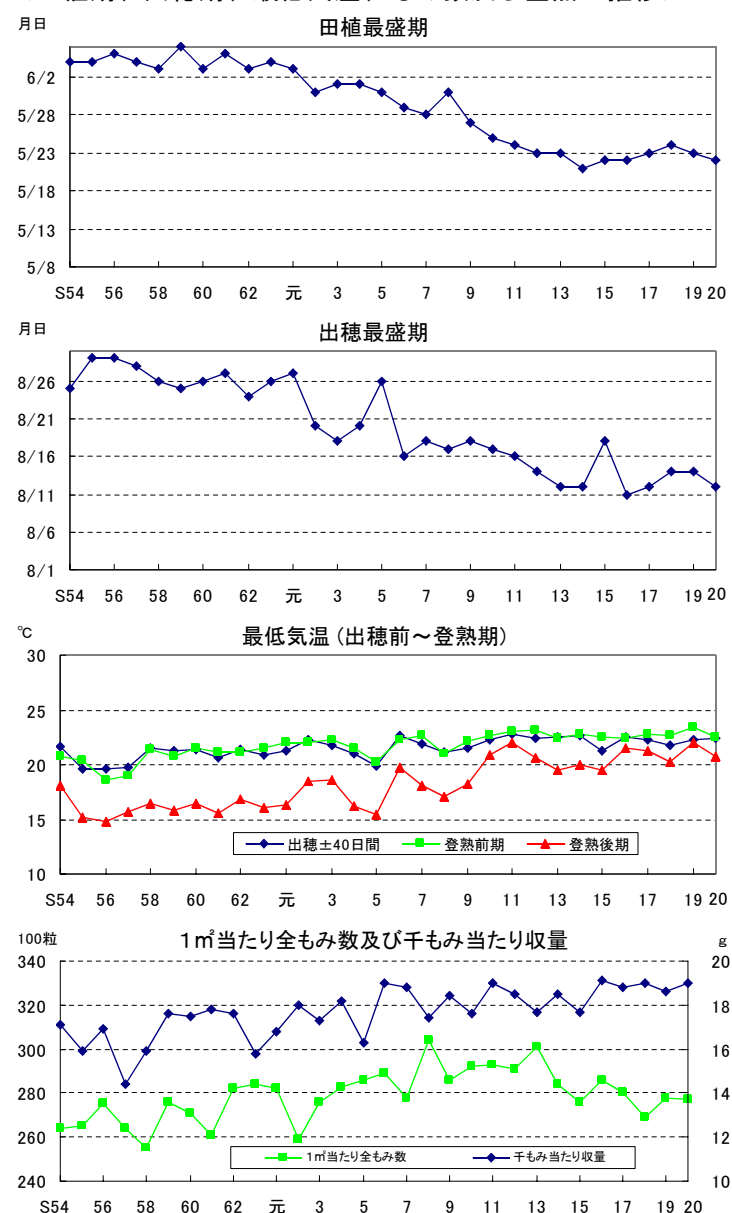
<品種別、地域別作付面積の動向による単収水準の推移>

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量(kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H16	17	18	19	20	21 (見込)
コシヒカリ	513	33.2	34.7	36.7	38.7	39.5	41.1
あいちのかおり	543	19.0	19.0	18.8	18.5	18.2	18.0
キヌヒカリ	526	16.9	16.8	16.5	16.2	15.8	15.5
ヒノリカリ	506	6.4	6.2	5.9	5.9	6.4	6.4
単収水準の動向(前年との差)					-0.4	-0.3	-0.2

地域(地帯)名	(参考) 10a当たり 収量(kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H16	17	18	19	20	21 (見込)
東部	508	26.3	26.3	26.5	26.5	26.5	26.0
中部	521	20.9	20.8	20.7	20.3	20.2	19.8
西部	512	52.8	52.9	52.8	53.2	53.3	54.2
単収水準の動向(前年との差)					0.0	0.0	-0.1

※ 10a当たり収量の水準は最近7か年のうち、豊凶2か年を除く5か年平均
平成21年産見込は市町村別の需要量に関する情報及び種子の予約数量から推計

<田植期、出穂期、最低気温、もみ数及び登熟の推移>



(鳥 取 県)

1 品種構成の動向

上位 2 品種が安定的に作付けられており、品種構成に大きな変化はない。

2 栽培技術等の動向

収量よりも品質に重点を置いた栽培技術（倒伏防止対策、適期刈取り、早期落水防止等）の指導がなされている。

3 温暖化の影響

コシヒカリの作付け増加や早植えの指導等により平成11年頃から出穂期が早まり登熟期間の気温は上昇しているが、直近4か年の一等米比率は50%を上回っており、九州北部のように温暖化で登熟が阻害されているとまでは言えない。

<最近の作柄（平成14年産以降）>

年次	全 も み 数	登 熟	被 害	作 況 指 数			一 等 米 比 率
				8/15	9/15	最終	
H14	—	○	◎	—	104	104	34
15	×	×	×	やや不良	91	89	53
16	—	×	×	平年並み	99	93	28
17	×	—	×	平年並み	98	98	58
18	×	○	×	やや不良	92	92	67
19	×	—	×	やや不良	91	91	70
20	×	○	×	平年並み	100	100	70 (1月末)

注：◎：良（多い） ○：やや良（やや多い） —：平年並み ×：やや不良（やや少ない） ××：不良（少ない） ただし、被害は◎：少ない
○：やや少ない —：平年並み ×：やや多い ××：多い

4 収量水準の動向

平成16年の連続台風等による大倒伏を契機に、17年以降施肥を控えた栽培が普及。その後、施肥を控えた栽培がコシヒカリからひとめぼれへ拡大し、施肥量のさらなる減少がみられることから、県全体の収量水準は低下している。

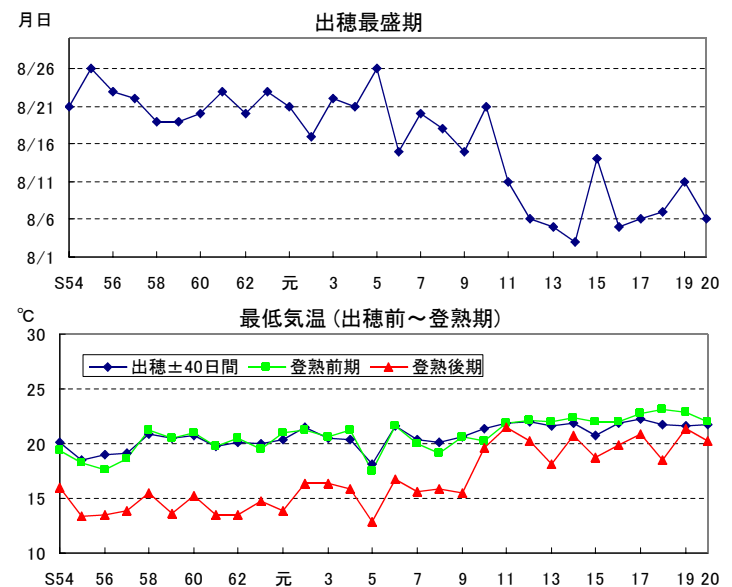
<品種別作付面積の動向による単収水準の推移>

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量(kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H16	17	18	19	20	21 (見込)
コシヒカリ	486	60.8	59.9	60.1	60.1	58.4	58.0
ひとめぼれ	509	28.8	29.4	29.7	30.2	32.9	33.0
単収水準の動向(前年との差)					0.2	0.4	0.1

地域(地帯)名	(参考) 10a当たり 収量(kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H16	17	18	19	20	21 (見込)
高収量地域	505	46.9	46.5	46.4	46.3	46.4	45.9
低収量地域	483	53.1	53.5	53.6	53.7	53.6	54.1
単収水準の動向(前年との差)					0.0	0.0	-0.1

※ 10a当たり収量の水準は最近7か年のうち、豊凶2か年を除く5か年平均
平成21年産見込は市町村別の需要量に関する情報及び種子の予約数量から推計

<出穂最盛期・最低気温の推移>



<施肥の状況>

施肥量の動向

		(kg/10a)				
中国 (鳥取県除く)	基肥	H16	17	18	19	20
	追肥	3.8	4.1	4.2	4.4	4.4
鳥取県	基肥	1.9	1.8	1.8	1.4	1.6
	追肥	3.5	3.5	3.7	3.8	3.8
島根県	基肥	2.7	1.7	1.8	1.1	1.4
	追肥	2.7	2.6	3.3	3.0	4.0
全国	基肥	4.7	4.9	4.9	4.9	5.1
	追肥	1.7	1.8	1.6	1.5	1.5

※水稲基準筆調査結果より

追肥を減らした農家の割合

	5年前に比べて減肥 した農家の割合	
	前年に比べて	
合 計	82	16
コシヒカリ	92	12
ひとめぼれ	77	23

※平成20年産で追肥を行った農家に対する聞き取り

(佐 賀 県)

1 品種構成の動向

近年は、品質低下等の被害が深刻化している「ヒノヒカリ」が減少し、良食味の「夢しずく」は増加傾向であるが、全体として、収量水準に大きな影響はない見込みである。

2 栽培技術等の動向

減農薬・減化学肥料栽培米の取り組みや、窒素分の施用抑制（玄米タンパク含有量の目標値は6.8%以下）などの指導が図られ、良質・良食味米の安定生産が進められている。

3 温暖化の影響

最近10年間の傾向を見ると、出穂前の気温に変化はみられないが、出穂後40日（登熟期間）の最低気温は大きく上昇し、一等米比率も50%を下回る年が続いている。

20年産は、例年より梅雨明けが早く7月がかなりの高温、多照となったことから肥料切れの状態となりもみ数が確保されなかった。また、登熟期の気温は19年ほどの高温ではなかったものの、特に最低気温が平年を上回り気温較差が小さかったことが、日照不足と相まって登熟を低下させたものであり、引き続き温暖化によるマイナスの影響が生じているものと推測される。

<最近の作柄（平成14年産以降）>

年次	全もみ数	登熟	被害	作況指数		一等米比率
				9/15	最終	
H14	×	○	—	103	101	36
15	×	×	×	97	95	43
16	—	×	×	98	80	25
17	—	×	×	100	93	23
18	×	×	×	74	49	26
19	—	×	×	100	95	25
20	×	—	—	100	98	34（1月末）

注：○：良（多い）　○：やや良（やや多い）　—：平年並み
 ×：やや不良（やや少ない）　××：不良（少ない）　ただし、被害は○：少ない　○：やや少ない　—：平年並み　×：やや多い　××：多い

4 収量水準の動向

品質に重点をおいた栽培が行われもみ数が減少する中で、登熟（千もみ当たり収量）が伸び悩み、単収水準は低下している。

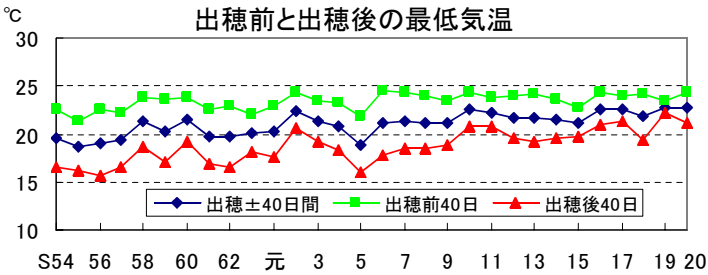
<品種別、地域別作付面積の動向による単収水準の推移>

主な品種名	(参考) 10a当たり 収量(kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H16	H17	H18	H19	H20	H21 (見込)
夢しずく	490	12.8	12.9	14.4	16.1	19.5	21.9
ヒノヒカリ	491	46.6	44.3	43.7	39.4	33.4	26.0
ヒヨクモチ	546	25.2	25.1	24.9	23.8	22.7	23.0
佐賀37号	...	—	—	—	—	—	5.6
単収水準の動向（前年との差）					0.0	0.0	0.0

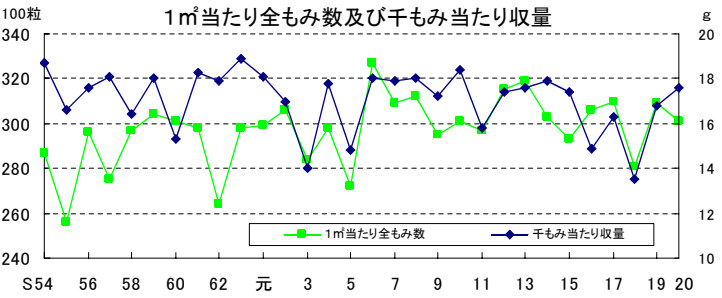
地域(地帯)名	(参考) 10a当たり 収量(kg)	年次別作付面積割合(%)					
		H16	17	18	19	20	21 (見込)
佐賀地帯	491	80.7	80.8	80.9	80.8	80.4	80.4
松浦地帯	469	19.3	19.2	19.1	19.2	19.6	19.6
単収水準の動向（前年との差）					0.0	-0.1	0.0

※ 10a当たり収量の水準は最近7か年のうち、豊凶2か年を除く5か年平均
 平成21年産見込は市町村別の需要量に関する情報及び種子の予約数量から推計

<最低気温の推移>



<もみ数及び登熟の推移>



<平成19, 20年産の出穂日以降の気象経過>

年産 (出穂最盛期)		最高気温(℃)		最低気温(℃)		気温日較差(℃)		日照時間(h)	
		年産	平均差	年産	平均差	年産	平均差	年産	平均比(%)
19年 (8/24)	出穂日+40日平均	31.9	3.3	23.2	2.6	8.7	0.7	6.7	116.5
	出穂日+20日	32.1	1.9	23.5	1.1	8.5	0.7	6.3	105.7
20年 (8/26)	出穂日+40日平均	29.1	0.8	21.5	1.3	7.6	△0.5	5.0	87.1
	出穂日+20日	30.6	0.7	22.8	0.7	7.9	0.0	5.5	93.7